

教育目標		つよく やさしく たくましい 花里の子 ～自他のよさを認め、自ら学び、考え、行動する子どもの育成～						
重点目標		①自己肯定感を高め、新しいこと、難しいことに挑戦する勇氣の育成②自らの未来を切り拓く「生きる力」の育成③『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善の地域と共にある学校づくりの推進④教職員の勤務時間の適正化						
主要 実施	施策目標 基本施策	重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者の評価
学校 教育	知・徳 体の 調和の とれた 児童・ 生徒の 育成	「確かな学力」の 育成 ①授業改善 ②誰一人取り残さな い取組 ③学校・家庭・地域 の連携	・基礎的、基本的な知識・技能を習得する。 ・家庭学習(自主学習を含む)を定着させる。 ・一人ひとりが主体的に学び表現力を高める。 ・豊かに表現できる思考力、判断力、表現力を育てる授業を展開する。 ・読書活動を充実させ、読書力の獲得を図る。 ・授業活動を充実させ、読書力の獲得を図る。 ・読書10分を週末の課題で出す。 ・朝学で読書の曜日をつくる。	・児童アンケートで、「授業がわかりやすく、楽しい」と回答した割合が80%以上になる。 ・学年×10分+20分の家庭学習(自主学習を含む)に取り組めるようにする。 ・放課後自主学習教室を開放し、児童が自主的に学ぶ場を設ける。 ・ワークシートや振り返り、考えの深まりが見られる。 ・児童アンケートを実施し、「はい」の回答が、「授業で自分の考えを持っている。」で8割、「授業(じゅぎょう)で、友だちの話を聞いて、自分の考えが気になり、新しい発見(はっけん)があったり、」なるほど」と思ったりすることがある。」が7割以上になる。 ・1週間の読書時間、合計70分以上を達成する。(図書・朝読・読み聞かせ・教室での読書時間の読書も含む)	B	・児童アンケートで、「1授業がわかりやすく、楽しい」と回答した割合が84%であった。 ・児童アンケートで、平日の学習時間が60分以上という回答が、4年生で38%、5年生で36%、6年生で20%と、芳しくない結果であった。また、保護者アンケートでも、家庭学習の習慣が付いているという回答は72%であった。週末の自主学習は3年生以上で実施されており、放課後自主学習教室を開放しており、全く意識が上がっていないわけではないが、さらなる普及が必要である。 ・児童アンケート(上のものは別のもの)が年度末である3学期実施のため未評価の部分が多い。児童の考えの時間を設定することや、単元全体の見通しを持った授業づくりについては各種研究授業等で実践することができた。 ・読書ボランティアによる読み聞かせを全学年で実施した。 ・学校司書と連携して、秋の読書まつりやクリスマス読書イベントなどのイベントを開催し、本に触れる機会を多設けた。 ・週に1回朝学習の時間に朝読書の時間を設けた。 ・1週間の読書時間が、30分未満のと回答した児童は28.7%と、昨年度の45.5%から大幅に減ったが、70分以上と回答した児童は32.0%と昨年度と大きく変化がなく、読書時間が多い児童が少ないことが課題である。	・引き続き、朝読書や基礎基本の定着を図る取り組みと、授業の改善により、児童が学びながら「楽しい」と思えるように努めている。 ・「家庭学習の手引き」等をさらに活用し、保護者に、家庭学習の習慣づけについて啓蒙を図る。 ・「生活振り返りアンケート」の実施により、保護者にも、家庭の協力が必要になることをアピールしていく。 ・引き続き、自主学習の進め方や、上手な自主学習の紹介を行い、児童に「どうすれば良いか」を提示したり、放課後自主学習教室の実施したりして、自主的に学習習慣をつけられるようにする。 ・詳しい改善策は児童のアンケートを持って検討する。方向性としては、学習の中で友だちの意見を注目でできるような問いかけの工夫や場面の設定を研究の中で取り組んでいくことになると思われる。	・一人ひとりを大切にしながら創意工夫のある授業が展開されている。 ・授業は児童が興味を持つように工夫されている。 ・学力テストの結果が全国平均を下回っているのは残念だが、少しずつ改善の兆しが見られる。 ・家庭学習の定着は難しい。宿題の量はどれくらい出しているのか。 ・自主学習の取組から、自分で課題を見つけ、タブレット等を活用して調べ学習などを行うことで、今まで知らなかったことを知る喜びを味わい、次へとつながっていく。 ・成果は少しずつ現れてる。学習習慣はすでに身につくものではないので、継続的に取り組んでいただきたい。「どうすれば良いか」「何故学ぶ必要があるのか」を認識させることが大切。 ・読書の工夫が素晴らしい。継続してほしい。 ・活字離れと言われて久しい。読書を読まない高校生も少なくない。読み聞かせなど、まずは興味を持たせることが大切。 ・家庭と連携して学校全体で読書時間の確保に努める。 ・ゲーム・スマホの時間が長くなっている。
		新しい時代に対応した教育の推進 ①情報活用能力の育成 ②英語教育の充実 ③デジタル化の促進	・授業の展開を工夫し、学習意欲を向上させる。 ・児童の情報活用能力の育成を図る。 ・情報活用能力の育成 ①授業改善 ②英語教育の充実 ③デジタル化の促進	・各教科に合わせてiPadやモニター等のICT機器を有効活用し、互いへの活用場面を気軽に共有することができるような場面を設定する。(自主研修のHOPを活用) ・夏期研修で情報活用について行う。 ・タブレットの操作などにおいて、情報活用能力を高める。 ・情報モラル教育の年間カリキュラムを組み、各学年1回以上実施する。(朝学習の時間を活用してもいい)	B	・授業で月10時間以上タブレットの活用ができていた。 ・教職員アンケートで「ICT機器(タブレット、モニターなど)を活用した教育活動を行っている」と回答した割合が90%以上であった。また児童アンケートで「タブレットやモニターを使った授業はわかりやすかった」と回答した割合は4・5年生は、90%以上であったが6年生は、85%と下回っていた。 ・他の教科と横断的に情報モラル教育を進めることができた。 ・児童アンケートで「自分にはいいところがある」と言える子が76%だった。 ・児童アンケートで「自分大切にすることや他人への思いやりについて教えてもらった」と回答した割合が88%だった。 ・児童アンケートで「学校に来るのが楽しい。」と回答した割合が96.6%だった。 ・不登校児童数は昨年度の同時期の比較では減少傾向だが、予備軍にあたる児童の数は増加傾向にある。	引き続き、ICT機器を効果的に扱えるよう「HOP」などで情報共有を行う。 ・児童の情報機器の取り扱いについての教育、情報モラル教育を行う。 ・アンケートで、自分に役割があると感じている学年における、学校への前向きな考え方が高かった。役割を持たせるための取り組みとして、日頃の学級経営を学び合える機会を作りたい。	・タブレットの活用は上手いのかされている。 ・さまざまな場面でのICTの活用がされている。今後は、業務改善につながる使い方を検討するフェーズ。 ・子どもたちのメディアリテラシーや情報モラルの育成に努めていただきたい。 ・ICTの使用で便利になるが、言葉の発達やコミュニケーション能力への影響が課題。
		「豊かな心」の育成 ①道徳教育の推進 ②いじめ等の未然防止、早期発見、早期対応に向けた組織的な取組の推進 ③不登校の児童生徒やその保護者への支援体制の充実 ④体験活動等の実施	・自尊感情、自己肯定感を育成する。 ・学級作りを工夫する。(支持的風土作り) ・いじめ等の未然防止、早期発見、早期対応に取り組む。 ・不登校の予防と解消を図る。	・子どもががんばりを学校と家庭で連携して促していく。 ・学級の中で自分の意見が安心して言い合えるような雰囲気作り(クラス作り)を進めていく。校内研修(年2回)で学級作りについても考える機会を設ける。 ・いじめ等に関する実態把握のためのアンケート調査を実施し実態把握を行い、はいや対応を行う。 ・積極的に家庭へ連絡をとる、連携を図る。	B	・児童アンケートで「自分にはいいところがある」と言える子が76%だった。 ・児童アンケートで「自分大切にすることや他人への思いやりについて教えてもらった」と回答した割合が88%だった。 ・児童アンケートで「学校に来るのが楽しい。」と回答した割合が96.6%だった。 ・不登校児童数は昨年度の同時期の比較では減少傾向だが、予備軍にあたる児童の数は増加傾向にある。	・アンケートで、自分に役割があると感じている学年における、学校への前向きな考え方が高かった。役割を持たせるための取り組みとして、日頃の学級経営を学び合える機会を作りたい。	・自己肯定感の高揚や、不登校問題等も家庭との連携が不可欠。 ・1回での相談の時間を長くすると、対話する時間を増やせないか。 ・疲れたり、認められず苦しむ経験が子どもたちの「自己有用感」を育てる。学校だけでなく、家庭や地域でも認められる。そんな取り組みが学校運営協議会の役割の一つのかもしれない。 ・登校を促す児童に対し、迎えに行くなどのきめ細やかな配慮がされている。今後も継続を望む。 ・子どもが落ちこむ学習でできるサポートルームの設置を望む。
		「健やかな体」の育成 ①児童生徒の体力向上の促進 ②体力ある部活動の推進 ③発達段階に応じた健全な食育の推進	・自ら進んで体力を向上させようとする児童を育てる。 ・運動の習慣化を図る。 ・運動イベントの実施(花里カップ・花リンピック・元気アップ運動等) ・睡眠、栄養、運動、休養などのバランスのとれた健康的な生活習慣を身に付けさせる。 ・「早寝・早起き・朝ごはん」を推進する。 ・食に対する指導を充実する。 ・感染症感染防止対策の徹底。	・週1回クラス全員で運動場に出て、体を動かす。 ・各学期に1回以上運動イベントを実施する。 ・夜は10時までに寝て、朝は7時までに起きている児童が75%以上いる。 ・朝ごはんを食べてくる児童が90%以上いる。 ・食に関する指導やほげんだよりなど、健康な生活に関する手紙の配布時に教師が呼びかけることにより「早寝・早起きを心がけている」が81.8%、「朝ごはんを毎日食べている」が92.7%と目標を若干上回った。	B	・運動イベントを各学期1回以上実施できた。さまざまな運動を行うことができ、主体的に体力向上に取り組めるようになった。 ・しかし、イベント期間でないときも自主的に外遊びをする習慣ができていないように見える。 ・食に関する指導やほげんだよりなど、健康な生活に関する手紙の配布時に教師が呼びかけることにより「早寝・早起きを心がけている」が81.8%、「朝ごはんを毎日食べている」が92.7%と目標を若干上回った。	・クラス遊びの機会を週一回作ってもらえるように声掛けをする。 ・引き続き、生活チェックシートにて自身の生活を振り返り、健康な生活に関する手紙などの配布の際や風邪などの流行の季節の際には、教師が一声かけることで、児童に意識付けをしている。	・運動イベントや生活習慣への取組を継続していき、児童の体力向上や健康意識の向上を図る。 ・高学年で体育の経験不足が見られる。小学生のうちに外遊びの習慣をつけていただきたい。
		教育相談・支援体制の充実 ①キャリア教育の推進 ②スクールカウンセラースクールソーシャルワーカーの活用 ③教育相談の充実	・自ら課題を見つけ、考え・行動できる児童を育てる。 ・目標に向かって努力し、意欲的に学び続ける態度を育成する。 ・関係機関と連携を図り、児童理解に努める。	・「キャリア・パスポート」を活用し、4月に年の目標設定を記入させる。 ・半年ごとに児童が自己の活動を振り返り、新たな目標や課題を設定させる。 ・子どもたちの成長を見取り、次の一歩を出せるようなコメントを教師や保護者が記入する。 ・スクールカウンセラーと細やかに連携を図り、児童理解を深める。 ・必要に応じて進路進路相談を行う。	B	・児童アンケートの結果は80.6%。教職員アンケートの結果は80.9%だった。 ・キャリアパスポートに記入することで、これまでの自分とこれからの自分を意識し、自分を見つめ直すことができた。 ・夏季研修としてスクールカウンセラーによる研修を実施し、家庭に課題を抱える児童についての理解や、児童が抱える課題や悩みを共有し、必要に応じて関係機関と連携することになった。 ・5月と2月に配慮を要する児童の情報交換会(生・同・特研研修会)を実施し、児童の理解を深め、必要があれば関係機関に依頼したり、進路相談や伊丹特支のコンサルを依頼したりし、児童理解に努めた。 ・「生・同・特研研修会」で名前があがっている児童の数と比べて、各学級担任から進路指導や、進路相談などの要望等が少なく感じた。	・キャリアパスポートへのコメントだけでなく、日頃から、自ら考え・行動できるように声かけや励ましをする。 ・教科を超えて、働くことの意義や目標に向かって努力することの素晴らしさ、大切さを伝えていく。	・スクールカウンセラーの充実 ・児童へのキャリアパスポートの意識付け。 ・職業の多様化、終身学習の意識、欠如の現状で将来の夢や職業について考えさせるのは非常に困難。キャリアのプランニングやデザインをする力が重要。 ・教育目標に向かって、外部の人の連携によるキャリア教育が進められている。 ・将来の夢や職業を考えている子が多く、社会に目を向けていることが分かった。 ・リアルな感覚が育っていない子どもによりよい人間関係を築くことの大切さも教えていくことが大切。
教育 環境の 整備・ 充実	安全・安心な教育環境の充実 ①学校園防犯訓練・防災教育の充実 ②子どもの安全対策の推進 ③交通安全対策の推進 ④学校園施設整備・維持保全 ⑤学校における働き方改革の推進	特別支援教育の推進 ①伊丹特別支援学校の活性化 ②特別支援教育の充実	・児童の実態把握に基づき、個別の支援計画などを作成し、保護者・教職員と連携をして、適切な対応を行う。 ・それぞれの子ども、校内支援体制を確立する。 ・通常学級に在籍する配慮を要する児童の特性や支援について、校内委員会や校内研修(年2回)で交流し、関連機関との積極的な連携を図る。	・かがやき参観・懇談を年2回以上実施する。懇談会に全体の半数以上の保護者が参加する。 ・全教員が特別支援学級児童を理解するための特別支援学級参観を年1回以上実施する。 ・コンサルテーションの実施等、関連機関と積極的に連携する。	B	・1学期と2学期に1回ずつ、かがやき参観や参観の参観・懇談を実施することができた。懇談会に保護者が8割以上参加していた。3学期にも実施する予定である。 ・全教員に向けた特別支援学級参観を実施することができた。また、公開授業も行った。みんなの先生に児童の様子を見ていただく機会となった。 ・5月と2月に配慮を要する児童の情報交換会(生・同・特研研修会)を実施し、児童の理解を深め、必要があれば関係機関に依頼したり、進路相談や伊丹特支のコンサルを依頼したりし、児童理解に努めた。 ・「生・同・特研研修会」で名前があがっている児童の数と比べて、各学級担任から進路指導や、進路相談などの要望等が少なく感じた。	・来年度も保護者参加の参観・懇談を2～3回実施し、教員に対しても公開授業を行い、支援学級の児童や、特別支援教育に対する理解を深めてもらえるようにする。 ・6月の生・同・特研研修会で名前があがった児童については、部会の度、特別支援コーディネーターから各児童のその後の様子を把握する。 ・新規で配慮が必要な児童が出てきていないが、毎月の部会で確認し、必要があれば職方等で職員全体で児童の情報を共有する。	・特別支援を必要とする子は年々増えている。いろいろな工夫をして対応している。 ・子どもたちの発達について悩んだ保護者が39名もいる驚きである。 ・親子の信頼関係をしっかりと築いてほしい。 ・授業の中で特別な配慮が必要で子どもたちへ先生方から丁寧に対応している。
		学校を支える組織体制の整備 ①コミュニティ・スクールの充実 ②地域と学校の連携・協働体制の構築	・積極的に学校情報を発信する。 ・学校生活の様子を公開する。 ・学校だよりを月2回発行し、地域にも配布する。 ・学校ホームページを週2回以上更新し、学校情報を積極的に発信する。 ・学校運営協議会と連携し、教育活動等に地域ボランティアを募る。 ・自治協議会との連携	・保護者アンケートで「学校の様子や目標しているものなどを分かりやすく伝えたい」と回答した割合が80%以上、「学校生活の様子に大変興味がある」と回答した割合が75%以上。 ・読書ボランティアによる読み聞かせを全学年で実施、地域ボランティアの参加による学習活動を3回以上実施。	A	・保護者アンケートで「学校の様子や目標しているものなどを分かりやすく伝えたい」と回答した割合が84.8%、「学校は保護者の願いに応えている」と回答した割合が78.3%。 ・学校運営協議会を窓口学習支援ボランティアを募り、放課後学習(年2回)、九九道場(9日間)夏休み自習室(3日間)を実施。 ・読書ボランティアによる読み聞かせを全クラスで実施(年2回)や2学期2回以上。 ・地域ボランティアによる「昔のくらしを学ぶ会」(3年)「昔の遊び」(1年)を実施。	・引き続き積極的に情報発信を行い保護者や地域の学校経営方針への理解を深めるよう努める。 ・学校行事や授業参観を各学期に2回以上実施し、学校の様子を公開する。 ・学校運営協議会委員に、日常の学校の様子を参観していただき、課題を共有する。 ・保護者との対話を大切にしたい学校運営、学級経営を行い、連携して学校課題の解決に取り組む。 ・体育館のICTに関連する設備が不十分。(モニター・appleTVなど)	・情報発信は積極的に発信されており、助け合い、困っていることがよくわかり、地域との連携も図れている。 ・地域や保護者のボランティア活動がもっと充実するよう多方面で努力する。 ・ボランティア活動が児童の学びに役立つようと考えている。 ・地域、PTA、市教委が学校の思いを理解して協力し、理想的な組織体制が構築されている。 ・学校に関わるボランティアが多く、地域の学校と連携している。
		教職員の資質向上 ①研修等の充実	・授業力の向上と授業の改善をめざした校内研究会を実施する。 ・自主研修会「HOP」でICT活用に関する交流を行い、ICT活用能力を高める。	・全ての教員が年1回以上授業を公開し、研修する。 ・教職員アンケートで「ICT機器(タブレット・モニターなど)を活用した教育活動を行っている」と回答した割合が90%以上になる。 ・全ての教員が年1回以上授業を公開する予定で進んでいることができた。 ・まなびポケットの導入の際に、職員研修を行うことができた。 ・職員がタブレットの困りごとが少なく、「HOP」の開催にばらつきがあった。 ・教職員アンケートで「ICT機器(タブレット・モニターなど)を活用した教育活動を行っている」と回答した割合が90%以上であった。	B	・保護者アンケートで「学校の様子や目標しているものなどを分かりやすく伝えたい」と回答した割合が84.8%だった。 ・「学校は学習の場として子どもが活動しやすい環境が整っている」と肯定的な回答をした割合が99.9%であった。 ・留守番電話設定時間の延長(17:00～8:00)、会議時間の適正化(学期1回13:30以降)、年間4回の業務改善委員会等を実施した。 ・超過勤務時間月平均45時間以上が1名。昨年度月比4名減。19%削減。	・公開授業の内容については研究の方向性に合わせて実施していく。 ・「まなび」を児童のためだけでなく、教職員の業務改善のための使用にも使っている。 ・教員がシステムが導入された際は、適宜職員研修を行う。 ・体育館のICTに関連する設備が不十分。(モニター・appleTVなど)	・業務多用の中、研修の充実が図られている。 ・1人1人実技の取組を通して、先生方は着実に資質向上している。 ・若手教員が生き生きと活動できているように見受けられ、児童も元気に活動する様子が見られる。

学校関係者評価総括 ○学校情報が積極的に発信され、不登校や特別な支援を要する児童への対応、学力向上等の学校課題の解決に向けて、地域やPTAと連携した組織的な取組が行われ、改善の兆しが見られる。 ○学校に関わるボランティアが多く、地域の学校として根付いている。 ●自己肯定感の高揚、不登校の削減、家庭学習や読書習慣の定着等、家庭との更なる連携が必要である。 ●タブレット等の利用時間の削減、情報モラルの育成、ICTを活用した業務改善への取組の推進に期待する。
次年度に向けた重点的な改善点 ・家庭やPTAと連携し、学期に1回の「生活振り返り週間」において「早寝・早起き。朝ご飯」の基本的な生活習慣を意識づけると共に、スクリーンタイムの削減、適切な睡眠時間の確保に取り組む。 ・児童支援職員、不登校支援員の活用、サポートルームの設置等、必要組織的な取組によって、不登校児童の削減を図る。 ・総合的な学習の時間の年間計画を見直し、各教科の学習と関連させた単元へのカリキュラム・マネジメントに取り組むと共に、児童が主体的、協働的に取り組むことができる学習を構想する。 ・「めざす子ども像」を児童と共有し、児童が主体的に活動できる学校行事や特別活動の機会を増やすなど、児童が活躍する学校づくりを行う。 ・全国学力・学習状況調査、CRT調査等の結果を分析し、児童が自分の課題をメタ認知して学習に取り組めるように家庭と連携しながら、朝学習、家庭学習、個別指導の充実を図る。